

祐・HOUSE

設計/e2(イースクエア)設計 馬場英治



コンクリート打ち放しのシンプルな外観



間接照明で優しさを表現したエントランス

「祐天寺」の門前町として栄えてきた東横線祐天寺の北側一帯も、近年は代官山と自由が丘にはさまれ、商業活動も活発とはいえない街となっている。

しかし、渋谷駅までドア to ドアで8分という好立地と街並み・街づくりに配慮し、1階はファッショングループの店舗をイメージ、2、3階は都心のIT系やファッショングループ企業に勤めるシングルをターゲットに計画されている。また、ワンルーム・マンションは地域の企業を支える弁護士や会計士、税理士事務所などがSOHOとしても活用できるよう、フレキシブルなデザインとしている。

建築概要

- 所在地 東京都目黒区
- 用途 店舗付き共同住宅
(ワンルームマンション)
- 構造 鉄筋コンクリート造
- 規模 地上3階建て
- 敷地面積 142.9m²
- 建築面積 112.7m²
- 延床面積 300.0m²
- 竣工年 2007年

馬場英治 e2(イースクエア)設計・p110

ルーテル学院大学職員住宅

設計/有連健夫建築研究室 連 健夫



南側に大きな開口部を持つ外観、雁行配置により屋根の取合いに趣を持たせている 写真:事務所提供

大学の職員住宅として標準的かつ共通の機能を備えつつ、入居者の個性が反映されるデザインを目指した3住戸のテラスハウスである。眺望の良い南側に大きな開口部のあるリビング、2階に個室が配される。吹抜けのリビングの階段を通り2階に至る空間構成により、一体化した空間の中で家族の自然なコミュニケーションの発生が意図されている。セミオープンなキッチンの位置は住戸によって異なり、個性あるプランとなっている。唐松三層合板の床、パーティクルボードの壁、OSB材の天井など木質系内装材が、木の優しさを感じさせる。



各戸いずれも南側に吹抜けのあるリビングを持つ。木の優しさを感じられる内装 写真:事務所提供

建築概要

- 所在地 東京都三鷹市
- 用途 専用住宅(3住戸テラスハウス)
- 構造 木造
- 規模 地上2階建て
- 敷地面積 774.71m²
- 建築面積 181.58m²
- 延床面積 267.00m²
- 竣工年 2005年

連 健夫 有連健夫建築研究室・p124

ケアヴィレッジ美乃里改修

設計／(株)スタジオアン 新田晃尚



教会・老人ホームなどの様々な空間のディテール。人が住み暮らすための機能と空間を豊かにするための計画をバランスよく両立させたことがポイントである 写真：事務所提供

これらは住宅ではないが、これまで福祉施設・病院・保育所あるいは教会といった、人が集まり・人を育て助ける空間の設計である。そこで培われてきた様々な手法や経験は住宅設計においてより効果的に生かされるはずである。とくに老人世帯・子育て世帯・2世帯と介護・セキュリティなどの分野では、従来と異なり、もう少しゆったりとした雰囲気を取り入れることで新鮮な空間をつくりだすことが可能である。建築家は、今後は住宅の設計にも積極的に係わって行くつもりである。



エントランスホール。老人ホームのリフォームである。住宅にもこうした少しうつたりとした空間の雰囲気を取り入れることが必要である
撮影：㈱エヌエス 和知彩子

建築概要

- 所在地 埼玉県新座市
- 用途 老人ホーム
- 構造 SRC造(一部RC造)
- 規模 土上3階建(屋上あり)
- 改修面積 2,137.90m²
- 竣工年 2003年

新田晃尚 (株)スタジオアン...p106

座談会

建築家に依頼する前に、

建築主は何をすればいいのか？

建築家の本音トーク

日時：2007年4月26日
会場：大光電機㈱ショールーム「D'Labo Aoyama」
参加者：加藤裕一／KSA一級建築士事務所／1964生
鈴木宏幸／アトリエ137／1971生

西崎寿志／西崎寿志建築研究所／1964生
宮崎 豊／MDS建築研究所／1959生
連 健夫／連健夫建築研究室／1956生
中尾晋也／大光電機㈱広報室長(特別参加)

ーしていますので、いろんな観点からのご意見をお聞かせ頂けるのではないかと期待しております。なお、本日の会場には、大光電機株式会社様にご協力いただき、青山にありますD's LABO AOYAMA(ディーズラボ青山)のサロンをお借りいたしました。



して伝えていければと思います。どういうところから考えていけばいいのか?、また、住宅で一番大切に考えるべき事は何か?といった事などを自由に話し合って頂きたいと思います。参加の建築家の方は、編集部で今回の掲載建築家の中からランダムに選ばせて頂きました。しかも、ご出席のお返事を頂いた方のみということなのですが、幸いにも50代、40代、30代と世代的には広くカバー

私共の雑誌もそうですが、テレビや雑誌等建築家に対する情報も増え、建築主にとってもハウスマーケターや工務店、あるいは建売住宅以外に建築家に設計を依頼するということも家を手に入れる場合の選択肢の一つによくなりつつあるという感じがしていますが、建築家に設計を依頼しようと思った時に、まずどういうことから考えればいいのでしょうか?

今後の生活や生き方を見直すきっかけに

連 健夫●確かに、以前に比べれば建築家に設計を依頼されるケースは、増えています。でも、まだまだ建築家と建築主の「出会いの場」は少ないと思っています。相談会や見学会等も開催されていますが、多くの人は雑誌や本を見て建築家を探すということになっているのではないかでしょうか。その場合、建築家をどう選ぶかということですが、出来上がった住宅だけを見て、建築家を判断するということには、少し疑問を感じています。一方、建築家だけを見て、「この人がいい」と思って設計を依頼したとしても、出来上がったものがちょっとどうかなということもあると思います。だから、両方、調べてみることが大事だと思います。

鈴木宏幸●私が、建築主や友達に聞かれた時によく話をするのは、いろいろ探すのも、もちろん大事ですが、自分たちの生活がどうなのか、今後どういう生き方をするのか、そういうことがもっと大切ではないのかということです。家をつくることが、そういったことを見直す機会になればいいなと思います。

西崎寿志●全く知らない人から連絡があるというのは、私の場合は結構少ないです。前に仕事で関わった人とか、あるいは子供を通じて知り合った人とか、そういう何かバックグラウンドがあって、知り合ったというケースが圧倒的に多く、仕事に結びつく確率も比較的高いと思います。話してみて感じるのは、今皆さん賃貸にしろ、借家にしろ、持ち家にしろ、どこかに住まわれているわけです。その住まわれている家からどういう風に変えたいのかということを知りたいのですが、それは難しいことなので、今どういうところに住んでいるのかという風に聞きます。でも、あまり満足に答えてもらえないですね。例えば「何m²ぐらいのところに、お住まいですか？」と聞いても、面積はあまりご存知ないことが多いです。そんな状態からものを造っていくのは、結構、時間もかかります。建築家にお話しいただく前に、自分たちがどういう生活がしたいのかということを家族

の中でしっかり話していただきたいと思いますね。

宮崎豊●私も対話ということがとても大切だと思っています。建築家というのは、必ずしも自分のつくるものはこれだと決めているわけではないし、建築主や敷地条件あるいは予算とか、そういったたくさんの要素をみて、全体を網羅するような空間にしていくという作業をするのが建築家の仕事と思っています。ですから、建築主さんも対応する時に自分はもうこれに決めた、これは変えないという姿勢ではなくて、建築家のアイデアを引き出して、自分の知らなかつた選択肢ややり方や暮らし方は実はたくさんあったのだという発見をするために、建築家を利用してもらえばと思います。そのためには、建築主の中で、自分



加藤裕一／KSA一級建築士事務所…p78

は将来こんな生活をしてみたいという具体的なイメージでもいいですし、近い未来について家族の間で話し合ってみて、こんな楽しい幸せな生活が出来たらいいなというビジョンを持っていただくことが大事だと思います。その時は、家族の1人が強く主導権を持って、決めてしまうのではなく、対等な立場でディスカッションしていただいて、アイデアを出して、それを言葉だけで行わず、ノートでも構いませんし、出来れば大きな紙にみんなで書き込んでいくというような、家族の中で一種のブレインストーミングみたいにアイデアを出し合ったりされると、それぞれ「こんなことを思っていたんだ」ということを再確認するチャンス

にもなります。それを箇条書きとしてまとめれば、建築家と初めて会って、打ち合わせする時に、「わたしたち家族はこんな未来の姿を描いています。こういう生活がしたいから、この予算、敷地に合わせたものを造ってください」という風に、話がスタートしやすくなると思います。逆に、家族間のコミュニケーションが全く取れておらず、夫婦の意見もバラバラのまま、建築家に仲裁して欲しいみたいな気持ちで話をされる方もなかには実際におられます。家族の中の意見調整、アイデアを出し合って、みんなでポジティブなビジョンを描き出すというのがやはり建築家に頼むまでにやるべき一番大事なことではないかなと思います。

加藤裕一●家を建替えようかなと思った方が、一番困るのは出会いの場だと思いますね。確かに設計事務所って表に看板がないので、どこにあるのか分からないとか、誰に相談していいか分からないというのが現実で、知らないところに電話したりということも結構、勇気がいる話でたぶんそこが一番問題なのだろうと思います。確かに、インターネットとかいろんなツールがあって、設計事務所が並んでいます。雑誌もたくさんあります。たまたま買った雑誌の中から選ぶとか、たまたまインターネットで検索して、自分のところは狭小だからと検索したら、何社か出てきたから順番に電話していく、そのときに話の具合が良かったところに、会いにいくというのが現実なのでしょうね。建てたい人はやはり自分が努力するというか、雑誌を買うとか、インターネットで調べるとかして、作風が合うなあというところに電話してみるとか、メールしてみるとかしているのではないかですか。電話したら、逆にハウスメーカーや一部の工務店みたいに営業がどんどん話しを持つて来るのではないかと不安に思われている方も多いと思うのですが、ほとんどの設計事務所は、営業的なことは不得意な領域に入っているでしょうし、専属の営業マンがいるわけでもないので、気軽に相談して、嫌ならやめればいい。というのが最初の部分なのではないですか。設計事務所には

気軽にメールで相談したらいいと思いますよ。とっかかりが難しいということはあるかもしれません、そういったところからでしょうね。インターネットからも1年に何件かは問い合わせがきますが、ハウジング会社に相談したとか、工務店に相談したとかで回ってくるケースが多いです。そういう意味では確かに、設計事務所のリストみたいなものがあれば、家を建てたい人にとっては見やすいのかなという気がしますね。

CW●以前に比べれば、設計事務所に依頼する人は増えましたからね。

連●間違なく増えていますよ。その大きな理由のひとつに、お金の話があります。従来は建築家に頼むと高いのではないかということがありましたよね。でも、雑誌とかテレビとか見てみると、建築家に依頼した建物は、価格を公表していたり、いろんな材料を用意していたり、すべてを明らかにしながら、建築主と最終的にまとめていくから、実は非常にリーズナブルに出来上がるということを建築主が分かってきたという時代に来ていると思います。

CW●価格面では分かりやすいですね。工務店の方が明細が分からない。すべてでいくらで出されてくるみたいなところがあります。建築家に頼むと、価格が細かく出てきて、どこをカットしたらいいかとか、相談に乗ってもらえるというのが雑誌やテレビ等で伝わったのでしょうか。

連●それもうひとつは今回の姉歯事件、耐震偽装事件の影響もすごく大きいです。やはり顔が見える状態で、モノをつくっていく必要があるという方向に変わってきていますね。顔が見えていれば、その建築家というのが、この建築主のためにということがありますからね。例えば隠し事をしたりとか、偽装をしたりとかそんなことはとんでもないことで、そんなことは絶対に起きないことがあるので、その辺は建売住宅だと絶対に限界があって、誰が設計者か分からぬ形で家を買うという形だったのですが、あの問題によって、そういうことに対してお客様の見方がすごくシビアになりましたね。それが結果的に設

計事務所を選ぶという理由になっているというの
がすごく多いです。おかげで(笑)、きちんとした
設計事務所は生き残ることが出来ると思います
よ。

鈴木●それと、家をつくるときに、設計者という
のが自分たちの味方になっていると思っているか
どうかは分かりませんが、建築主の立場で一緒に、
専門家として判断してあげられるというのが、一
番いいのかなと思いますね。

連●結局なんか保険みたいなものですね。保険で
あり、弁護士であり。直接、工務店とやりあった
ら太刀打ちできないけど、建築家がいれば、建築
主側に立ちますからね。

建築主と建築家の間に信頼関係を つくることが大事

CW●相談に乗ってもらえる相手を考えると、建
築家の存在というのは分かりやすいかもしれません
ね。ハウスメーカーの場合には、向こうは物を
売ろうというのが根底にありますからね。相談は
出来ても、どんどん向こうのペースに巻き込まれ
ていきますが、建築家の場合は、あくまでも相談
であったり、アドバイスという形から入ってもら
えるでしょうからね。

連●その時に一番大事なのは、建築主と建築家の
間に信頼関係をつくるということです。知ってる
人が建築家なら、信頼関係が担保されている上で、
依頼することになるでしょうが、知り合いでもなく、
選んだ建築家の場合は、まだ信頼関係が出来
上がってないですから、そこできちんと信
頼関係を作りながら、ものをつくっていくとい
うことをしない限りは、後で破綻したりしますよ。
で、その信頼関係をどうやってつくるかというの
がポイントで、きっとコミュニケーションがき
んと出来るかどうかということだと思います。それと先ほど、皆さんがおしゃったビジョン。これを
しっかりと持つことによって、ビジョンを手が
かりにコミュニケーションが出来るわけなので、
その材料がないとなかなかしんどいですね。先ほ
どの話のように、材料が豊富だとコミュニケーション

ヨンが深まることもあります。その中で、押し付けの設計をするのではなくて、コミュニケーションを経た上で、何か建築のテーマが生まれてくれれば、一番いいですね。

宮崎●お互いが対話をするというのは、お互いがそれぞれ自分のアイデアをきちんと持っているということが前提になります。ただ、それを絶対に変えないというのではなくて、お互いにいい発見をしながら、もっといいものにしていく。お互いにちょっとずつ変わりながら、共同作業でいいものを組み立てていくという作業が設計で一番大事な部分だと思うのですよね。そういう意味では、ものを買うというのと建築をつくるということは、やはり違うのですよ。一般の方が日々行っているのは、例えば家電量販店に行って、洗濯機をどれにしようかとカタログを比べる。あるいは自動車を買うときにもスペックを比べる。そういう買い物方に皆さん慣れてしまっている。建築の世界にもそれを持ち込んでしまう方というのは非常に多いんですよね。けれども、実際には建築というものは買うものではなくて、その家族だけの、あるいはその人だけの、今までの人生、これから的生活方にぴったりと合うような、その敷地や環境に合うような、地域に合うような、そういったものを一緒に建築家と建築主が組み立てていく作業であると思います。ですからやはり、決まったものを買うというような意識じゃなく、アイデアをシェアしながら、自分の恥ずかしいところも、実はこんな生活をしているのですといったことも信頼関係の上で聞かせていただいて、それに合ったいい空間、もっと楽しく気持ちよく住めるようなものを提案していくような情報をシェアしていくことが大事だと思います。そういう意味では、お互いに最初会ったときと、建築が出来上がったときと、お互いに変わっていいと思うのです。それでお互いに何か、考えを理解し合っていて、お互い共通の価値観を持っていて、それで出来たものというのはやはり、その人だけの人生を送る大切な器になるのだと思います。

西崎●皆さんの意見と同じなのですが、設計の条

件もまだ整理出来ていないのに、お客様の方で、雑誌を何冊か持ってきてこられて、こういう感じでお願いしたいのだけれどもみたいなことがあります。冷めた目で見ると、女性の方がタレントの写真を美容室に持っていくのとあまり変わらないような気がします(笑)。そうじゃないのですよと話をしながら進めていくんですけど、初めは家を考えるということが、どうしていいのか分からぬ方が結構いらっしゃると思います。設計者だけではいい建物はつくれないので、やはり時間をかけて、家族でよく話しをしてもらう。それがすごい大事だなと思います。結構、お客様と話しても、宮崎さんがおしゃったように、奥様とご主人の意見が違って目の前で口論が始まってしまう、なぜ、家族内で話が出来なかったのかなと思うことがあります。

何か気がついたときには、遠慮なく言って欲しいですね。気になったことを言わずに、進めていくと、後で戻れない場合があるので、気になることがあるときに話し合いをして欲しいです。そういうことを説明しておかないと大変なことになりますよ。

CW●それは建築主側が、提案をされている部分について、具体的にイメージが出来ない場合なのでしょうか？

連●そうですね、ある意味、話し合いの材料は建築家側で用意する必要もあると思います。今まで住んだ中で、経験できる住宅とか空間とかは限られているので、それ以外のライフスタイルや空間とかは体験したことがないわけですよね。ですので、そのための材料は建築家として用意すべきだろうと私は思うんですよ。それをもとに家族で話し合ってくださいと。ただ話し合ってくださいだけでは無理なので、その辺のきっかけづくりは、建築家がやらないとちょっとむつかしいかなという感じはしますね。

西崎●ただデザインは別として機能的に、今、住
まわれているなんらかの場所があるわけですか
ら、そこに対して、どういう不満があって、どう
いう風に変えたいか、そういう話からでも始めて
頂くのが良いと思います。

連●それは一番いいですね。身の回りから入って
いくわけですから。そこからでしか、話し合いを
進められないと思うのですよ。

CW●ご夫婦で意見が合わない、目の前で口論にな
ったりするということは、これから建てようとい
う家について、家族で話し合いはあまりなされ
ていないわけですね。こんな家がいいのではない
かなというようなことも話し合いされていないの
ですか？

加藤●きっと建築家にまとめて欲しいのですよ
(笑)。お互いの意見をうまく取り入れて、提案して
欲しいのですよ。だから、話し合いが不十分な
まま来られて、口論になたりするのではないか
という気がします。第三者がいるところで、話し
合いをするのが家族的にはいいのではないでしょ



鈴木宏幸／アトリエ137…p98

気になったことは遠慮せずどんどん言う

鈴木●あと、結構受身になられていますよね。も
ちろん、いろんな方がいらっしゃるとは思うので
すが。

連●結構、お任せしますと言われる時があるの
ですが、そのお任せしますと言われるのが一番怖い
のですよ。打ち合わせが進んできて、ある程度まで
いったとき、「こうじゃなかった」と。私が考
えていたのとちょっと違ったということもあります
し、建物を建築している途中でもありますよね。

うか。

連●その話はよく分かりますよ。建築家がある意味、カウンセリングの役目も持っているのではないかと。家族の中、夫婦の中でも、住居に対する夢がズレるのは当然だと思います。その建築家を目の前にして、思いをぶつけることによって、何かがブレイクスルーできるんじゃないかなというような面も少しはあると思うんです。それは、ある意味、コミュニケーション能力だと思うんですね。これは建築家によっていろいろだと思いますけど、そういう時にこういう形はどうでしょうかということで、デザインとか設計を通して、何かコミュニケーションを深めていく。これは単に、夫婦の問題を解決するということであれば、本当のカウンセラーだと思うのですよ。我々は建築家なので、デザインを提示しながら、何かいい方向にもっていく、人間関係も含めて。そういう感じがします。そんなことはないですか？

鈴木●私の場合は、割合、ご夫婦でよく話し合って、来られる方が多いですね。将来の生活のイメージとかがしっかりあったり。

先ほどの雑誌とかを持ってくる方もいらっしゃいますが、それはそれでいいのかなと。むしろ、やってもらいたいですね。なんでもいいから自分の好きなものから集めていくことから始めるのもひとつだろと思っています。あとは今、住んでるところの不満を考えるというのもひとつだと思います。それと私の場合は極力その人の家に行くようにしています。もちろん許されればすけど、だいたい嫌だという人はいないですね。例えば、すごく気に入っている家具があって、家族でその家具についてどう思っているかというのもひとつきっかけになるのではないかと。そういう身近な

ものなど小さいことの積み重ねだと思います。家を建てるのが初めてという人が多いので、大きなことってイメージしにくいのだと思うのです。

加藤●人間って保守的なものですから、設計事務所にデザインを期待はしていても、デザインするとどこか新しい部分が出てくるわけですよ。現在、狭いアパートに住んでいて、新しい家に住むという時に、例えば日本の標準的なアパートを見ても、想像できるのは経験の範囲だけですよね。新しい家をつくるときに、吹き抜けがあるとか、天井が高いとか、リビングの上が抜けているとかということが建築主が具体的に想像できないことがあります。建築主は、今住んでいるところが基準にな

つていて、設計する側は、それと違う部分を与えてあげないとと思います。例えばメーカーでも出来るデザインを設計事務所がしても、それでは建築家に頼むメリットが減ってしまいます。設計事務所が設計するということは、何か今までと違う良さや家に魅力があるという部分をつくってあげようとしてるのですが。そうすると建

築主の想像が保守的ですから、自分の今までの経験、例えば今まで育った家が建売だったとしたら、家族が増えて狭くなったからとか、老朽化したから建替えようという時に、その領域をなかなか出れないのです。そこは、打ち合わせのときに結構、気を使いますね。スケールを持っていって、この長さはこの位になりますとか、天井の高さはこの倍ですよとかという説明をしています。

夢は決して諦めない

西崎●建築主の家は、絶対に見ないと、一度も行かないでつくるというのはちょっと僕は怖くて出

来ないです。建築主が今住んでいるところがどういう状況で住んでいるのか、共通の感覚をつかむためにも伺うようにしています。例えば、新しい家は前より狭くなってしまうとか天井が低くなってしまうとか、具体的に洗面が小さくなってしまうとか、そういうことが気になるので、やはり事前にチェックして、新しい家はこうなりますときちんと説明するようにしています。

加藤●どこの設計事務所がしても、多少、事務所によってデザインや流れが違うというのはあるでしょうが、必ず1回以上は建築主の家に行って、どういう状況で、どういう風に住まわれているのかを見て、新しい提案をする。メーカーの場合は

ばらつきはあると思いますが、1案出して契約しますね。工務店も近い感じです。設計事務所って案は出すけど、建築主の住んでいるところに行く、見る、スケールで測る、打ち合わせをするということを何回かしているうちに、これはこうした方がいいなとか、ここはもう1回見直さないといけないというところが出てきて、場合によっては、最初の提案と比べてかなり変わることが設計事務所に頼むとあるのですが、それが良さだと思います。ハウスメーカーのやり方を普通だと思っている人は、1案を出したらこれで決まりだと思われるでの、この値段でしてくれるのですかとなってしまいますね。設計事務所というのは、設計期間がかなり長くて、半年位はかかりますから、そのうちの2ヶ月位は基本設計にとられますね。最初はアイデア出しなので、その時には建築主との打ち合わせで、こんな家にしたらいしいじゃないですか、こういうアイデアもありますよということをどここの設計事務所もされているはずです。その案をもとに打ち合わせをして、何回もそういう話をしながら、最初のかたちとは変化しながら、家を建てる人にとって、おそらく一番いいであろうという形になっていって、それから予算との調整の中で、実施設計までいって、まとまるわけです。そのために、こうしましょう、ああしましょう、このままだと値段が合わないから下りますよというものが当然出てきます。あるものを買うので

はなくて、つくるわけです。頼むということは、自分の生活スタイルや自分たちの欲しいものとそれに予算と見合わせて用意できるものの中でおそらく一番いいものつくってくれるのが設計事務所じゃないかと思います。その代わり、デメリットというと、ショールームに行ってこれっ！というのではないですから、その時点ではどうなるか分からない。もちろん、まったく分からぬといふことではないですが。それがいいか悪いかということの判断は、建築主がしなくてはいけないことだと思いますね。

CW●家をショールームで選ぶという感覚が、ますいということですか。

連●それが一番の問題点という気がします。建物の雑誌を持ってくるという話もありましたし、最初はそれでもいいと思うのですが、ひとつあるのは、その人の夢みたいなものをつくりたいですから、その夢になる素となるものを建築主から得たいですね。私の場合は、建築主に理想の家というタイトルで、コラージュ、つまり切り貼りを作ってもらいます。いろんな雑誌から切り取ったものをペタバタと貼りつけてもらって、それを見て、そこからディスカッションしながら、イメージを膨らましながら、建物のコンセプトやテーマを見出していくというやり方をしています。そのときにこういう風にしてくださいと注意点があります。それは、建物の切り抜きや実際の空間はなるべく貼らないで欲しいのです。では、何を貼ってもらうのかというと、その人の好きなもの、趣味とか色とか、自分の好きな花、食べ物とかなんでもいいですよ。そういうものが貼り付けられていると、その人の価値観みたいなものが理解できるようになるわけで、そこから何かいいものが生まれるということがあります。最初から、カタログ的にこれを選ぶ、あれを選ぶという設計であれば、おそらく建築家に頼む必要はないと思います。我々は、それぞれ個性がありますから、その中からオリジナルな世界でただ一つのデザインをしていく力を持っているのが建築家ですから。その一番素になるようなものをどうしても知りたい

ですね。

CW●建物の写真を貼らないというのは、そこから抜け出せないケースがあるのですか？

連●ありますね。

宮崎●予算がないからといって、すごく遠慮して夢をあきらめてしまうということをしないで欲しい。お金をかけないと、いい空間やいい建築が出来ないのではないかと思っていらっしゃる方が非常に多いですね。決してそういうわけではなくて、安い材料、本当にチープな材料だけを使っても、美しい光を導入したり、気持ちのいい風が流れたり、空間の形が美しかったりとか、ここにいて気持ちいいなど感じる空間をつくるというのは、可能なのです。その領域というのは、我々建築家が得意とするところであって、ハウスメーカーや建売住宅では得られないものだと思います。あとは敷地条件もですね、更地や勾配のほとんどないような土地でないとハウスメーカーのプランはだいたい合わないわけですが、ものすごい変形地だったり、崖地だったり、勾配があるとか、普通は劣悪な条件と思われる敷地でも、それを逆手にとつて面白い建築を作るということを建築家は得意とする分野なので、だから決して夢をあきらめないで欲しいと思います。どんな劣悪な条件でも、それをプラスに変えられる部分はきっとあると、むしろそれは、他にない面白い特徴となって、オリジナルなものをつくるきっかけになることもあります。

プロセスを楽しんで欲しい

宮崎●ハウスメーカーの場合は、性能的な設定が決まっていて、やたら材料を変えると性能が変わってしまい、保証が出来なくなるので、そういう設計はしないという極めて範囲の狭い領域でしか変更がきかないことがあります。そういう意味では、メーカーで特殊なものを頼んでしまうと非常にコストがかかってしまう。そういうときは、建築家に頼んでしまえば、特殊なものだけで、ローコストに収まったという実例はたくさんあります。

CW●部材の寸法をわずかに変えるだけで、倍近い値段になる場合もありますね。

宮崎●プランというのは、決して標準なものがあって、それを選ぶというものではないですよ。建築主の家族の中でのディスカッションによって、なりたい生活の姿、近未来のビジョン、それから建築家が敷地や環境を見たりしながら提案するものであって、さらにそれが膨らんでいけば、決してしほんだ夢である必要はない、限られたものの中で、悪い条件をいい条件としてとらえて、それをポジティブに変換していくということで、面白い、どこにもないものが出来ていく。そういうきっかけになればと思います。そういう意味で、建築主との打ち合わせも、すごく難しい難題を提示される場合もあります。もちろん冷や汗が出たりもするのですが、それをチャンスだと思うようにしています。それを「巴投げの精神」と呼んでるのですが(笑)。巴投げというのは、柔道でとても強い相手と組んで、すごい力をかけて来られたとき、その力をを利用して、ほいっと投げる技なのです。実際の実務の中で、これは困ったなどいう問題が出たとき、1人で考え込まないで、いろんな人と考えながらディスカッションしていくと、大変と思われた問題が、実は面白いものを生むきっかけになったりすることが、たくさんあると思います。ですから、建築主のほうも、「これは大変な家族の問題だから、黙っていよう」と遠慮してしまって、一番最後になって、実は本当はこういう問題があって、こういう風にしたかったんですといわれるのは、建築家にとって、一番困ることです。早いうちに問題として、全部教えていただきて、逆にそれを空間をつくるためのポジティブな方に転化していくというのが、建築家ができる仕事です。そういう意味でも、ぜひ心を開いて、難しい条件でも遠慮しないで出していただくということが大事だと思います。

CW●そこまで、問題をオープンにしてくれる建築主は少ないでしょう？

宮崎●打ち合わせの回数を増やせば、引き出せるようになります。そのためにはある程度の時間を

かけることは大事なことだと思います。特に、消費税がいつ上がるからとか、融資がいつまでだからとそんな条件で、ハウスメーカーの場合だと4回位の打ち合わせで、設計期間が1ヶ月もなくて着工する例もたくさんあります。建築家と建てる場合に、そんな風に短期間でしようとすると、全然メリットがなくなります。信頼関係を築いて、対話の中から、ちょっとずつ言いにくかった条件を出してもらうためにも、打ち合わせの回数といいのは時間をかけて、回数を増やしていくかしないといけないです。そのために建築家側も仕事をあせっちゃいけないと思います。時間が長ければ長いほど、設計事務所にとっては負担は大きくて、早く終われば終わるほど、効率がいいのですが、最後にやっぱり建築主さんが満足した顔を見られないというのは、建築家としてはなんのために生きているのか分からぬぐらいためです。やはり、最後には建築主さんに幸せになって、本当に面白かったとプロセスを楽しんでもらう。いいもの出来たなあと、ここ住んで幸せだなあと家族全員が思ってく

れる位ちゃんとしたものをつくるには、それなりにコミュニケーションの時間、プロセスをきちんと踏むという条件を整えていただきたいと思います。なるべく打ち合わせの頻度を増やしながら、たくさん図面を描いてまとめて打ち合わせするのではなくて、ちょっと描いては打ち合わせして、修正して出来たらまた打ち合わせしていく、そういうプロセスをとるように努力しています。

鈴木●私もプロセスが、とても大切だと思います。家をつくる機会は、そんなにたくさんあるわけではありません。せっかくの機会ですから、建築主の方にもその過程というのを一緒になって、前向

きに楽しんでもらいたいと思います。建築家に依頼して設計期間を楽しむ、そのための費用や時間を自分の人生の中で割くんだという感覚を持ってもらえばいいなと思います。

連●「プロセスを大切にする」これは重要なキーワードですね。よく、ご主人だけが打ち合わせに来るとか、奥さんだけが来るという場合があるので、出来たら一緒に来て欲しいですね。可能なら子供さんも一緒に参加して欲しいです。家づくりは人づくりだといえると思います。建築家と家づくりをすると、プロセスを大切にしながら、山あり谷ありの打ち合わせをしていく、そういうことを経験しながら出来上がった家、それを経た後では建築ってこんなに面白いんだ。家族の中

で、今までと違う相手の良さを知ったりとか、奥さんのいいところが分かったとか、ご主人のいいところが分かったとか、そういう人づくりみたいな形に結果としてなるのですよ。ですから、家をつくるための時間は大事にして欲しいですね。

CW●いい建物ができるかどうかのポイントかもしれませんね。

連●そうだと思いますよ。とくにお子さんの場合は、参加されるとすごく顕著に影響が出ると思います。今までただ見るだけだった家というものが、自分の家として出来上がっていき過程、設計者がいて、大工さんがトントンと作業して出来上がっていきという一連のプロセスを見ると、ずいぶん変わりますね。大人になるというのですかね。最初に話した感じと出来上がった後では全く違う。そういう経験を経た子供というのは、子供部屋のしつらえがすごくうまくなりますね。そういう風に椅子や机を置こうか、何を飾ろうかまで非常に楽しんでいます。竣工後、子供さんと話をす



宮崎 豊／MDS建築研究所…p120

ると、こういう絵を買って飾ったとか、こんな風にしたとか、そういう話を喜んでしてくれます。彼らにとっては、それが建築なのですよ。それはすごく面白いと思います。

宮崎●とても大事なことだと思います。その建築の中で育っていく、その過程で建築から潜在的に受ける影響ってものすごく大きいと思います。子供が成長していく過程で、自分の住んでいる家から、ものを見る基準を常識として身に付けていたり、自分の家がこうだから、住宅ってこれが当たり前なんだという常識がそこで生まれたり、自分の家にはこんなにすばらしい光や空間があるというところで、感性が豊かになったり、そういった部分ではたくさん影響があると思います。

人間が家で成長していくというのは、カラダが大きくなるのと同じように価値観も成長していくものだと思うのです。それは子供であっても、大人であっても同じだと思います。お仕着せのもので我慢して成長していくよりは、のびのびとどこにもない、自分の快適なスペースを手に入れて

価値観を育てていくということは、子供でも大人でもとても大事なことではないかなと思います

連●確かに、いろんな要素が、ありますよね。材料や光、匂い、音、そういうものが建築にはすべて含まれているので、お子さんがいらっしゃる方なら、建築家に依頼して、子供たちがプロセスに関わりながら進めていくとすごくいい学習の機会だと思います。例えばトップライトが欲しいという時に、コストコントロールの中で予算をオーバーした。じゃあ、それを採用するかしないかで悩むわけです。それを家族の中で相談するという経験は、トップライトがあることの良さ、費用がな

ければ、どうやってやりくりするのか、その場合はトップライトをやめて、窓をもう少し大きくしようといったやりくりみたいなものを覚える。お金の価値、やりくり。建築の中には全ての要素が入っているといつても過言じゃないと思うのです。学習の場としてはすばらしいと思います。

鈴木●自分が関わったものの中に、身を越けるというものがまたいいですよね。小さいお子さんは特に。どちらかがかけてダメで、プロセスを経験するだけじゃなく、そこでまた何年かを過ごしていくという体験がすごく大きいと思います。

連●そうですね。それと工事中に、何度も現場に来てもらうといいですね。大工さんも張り切りま

すから。この人のために、作業してのだと思うことが出来ますからね。そうなると自然と大切につくるという気持ちも生まれます。建築、住宅造りって、結局最後は人ですからね。建築家がいろいろいデザインをしても、それをつくるのは大工さんや左官屋さんなわけですから。だから、何度も現場に来て欲しいのです。手作りの中

で、どういう風にものが出来上がっていくのか。いろんな専門の職人が入ってきて、出来上がっていくということも分かります。現代は、仮囲いでかこって、安全や安心ばかりを理由に、工事中の状況が外から見えないという状況があります。昔は仮囲いなんかなくて、子供たちが遊びに来ることができ、そこで大工さんと話をしたり、左官屋さんと話をしたり、将来の仕事を見つける機会の場にもなっていました。せっかく自分の家を建てるのであれば、子供たちをどんどん途中の段階で工事の状況を見に来させたらいいと思います。意外と危くないですよ。



連 健夫／連健夫建築研究室・p124

鈴木●それにつくる過程を見ていると、大切に使うことがありますね。大切に思う気持ちが生まれてくるのが、とてもいいですね。その気持ちを育てていくというのも過程の中にたくさん詰まっていて、暮らし始めてからも大切に思う気持ちが育っていくのだと思います。

自分にとってなくては生きていけないモノを考える

CW●新しく家を建てる時に、たくさんあるモノをどうするのかについては、どういったアドバイスをされているのですか？

連●建築家の中には、収納をあまり作りたくないと思っておられる方もいらっしゃると思いますが(笑)、建築主の希望としては、収納をたくさんつくって欲しいということが多いです。もちろん、最初に、新しい家づくりをきっかけにいらなくなったモノを整理しましょうとは言います。整理ということは、不用なものを捨てることだということになるわけですが、整理するときに、1年間使わなかったモノは、恐らく今後何年も使わないということになるのではないかというアドバイスはしています。まず、そういうモノから整理していくことが手を付けやすいと思います。それもうひとつ、設計していくときに将来ここに収納を設けることが出来ますよということで、今はあえて設けないこともあります。最初は、まあ少ない中で、どうにかやりくりしてもらう(笑)。無理そうだったら、新たに収納を設けるということは、いわば担保として、説明しておきます。

加藤●よく説明しておかないと、住み始めてからも整理できないで荷物がいっぱい置いたままになっているなんてことがあります。どこにしまえばいいのか分からない、分からないからそのままになるというわけです。住み始めて、モノが所定の場所に落ち着くのには3ヶ月ぐらいかかります。でも、どんなに収納があっても、最後は入らなくなってしまいますね。収納があればあるだけ、捨てないようになるので、整理しないとやはり同じ話だと思います。本当に収納はどんなにつくって

も足りないです。

宮崎●収納をたくさん作ってしまうと、その奥に眠っているものもどんどん増えていくということをよく聞きますね。人間が生活するのにどれだけ必要なモノがあるのかというと、本当はそんなに多くはないのではないかと思います。本当に自分にとって、なくては生きていけないという位に大事なモノというのがどれ位あって、それが何なのかということは、プランを建築家につくってもらうと同時に、建築主側でやらなくてはならないことだと思います。現代はモノが豊富な時代です。私の祖母の代ぐらいの人だと、一度そのモノを手放すともう二度と手に入れられないという不安を抱えて生きていた時代があったのですが、今の時代は、逆に不必要的ものがたくさんあって、それに周りを囲まれて空間がつぶれて、もったいない暮らしをしているという状況があちこちで起きていると思います。そういう意味では、引越しをするというのは、またとないチャンスですから、自分の持っているものを全部チェックして、整理して、捨てられるものは全部減らすと。少ないかなと思うぐらい、減らしていいと思います。結婚式の引き出物だったり、いただいた物なので捨てられないとかで、人生の過程の中でどうしてもモノは増えてきます。バランスよくある程度のゆとりある収納を設けるということは、必要だと思いますが、過剰な収納で眠っているもののために、貴重な土地の面積を、しかも東京の場合だと高いですから、占領してもらいたいことになっているという現象も起こっていますね。だから思い切りよくモノを減らすということも、美しい生活を実現する大切な要素だと思います。

鈴木●私の場合、建築主の方とお話しするのは、モノのために家をついているのではない。住む人のために、つくれているのであって、もちろん必要なモノはあるわからから、その分の収納はりますが、何十万円もかけて必要なモノのためにつくるということはもったいない話だと思います。

西崎●以前にリタイアされたご夫婦の家を設計し

たことがあります。子供さんたちはすでに自立されていたのですが、その子供さんたちの学生の頃のモノがいっぱいあったのです。はじめは収納をたくさんつくって欲しいという話から始まったのですが、二人でしか住まないので、モノを収納するための部屋をつくるのはもったいないので、もうちょっとモノを整理しましょうという話を設計期間中にしたのですが、なかなか納得してもらえなかったです。最終的には、いろいろと置き家具を置いていくと、これから老後を迎えるにあたって危ないのではないかということを、娘さんたちともだいぶ話しをして、やっと決心されて、収納は造りつけにしてくださいということになりました。最初は、私自身もそういう展開になるとは思っていなかったのですが、置き家具などをレイアウトしていくうちにだんだん危ないなと思うようになりました。モノと生活には、そういう観点もありますね。

中尾●私は趣味で、ミニチュアカーを集めています。それもバスのミニチュアカーです。もう40年ぐらい集めて

いて、3,000台ぐらいになっているのです(笑)。自宅の設計を頼んだときに、「これをなんとかしたい」「そんなにどこに並べるの?」という話になってしまった(笑)。そうしたら、建築家の方が階段の下を利用して、ボンネットバスの形の引き出しを作ってくれて、そこに収納したり、壁厚を利用して棚を作って、そこに収めたりしたのです。見た目もきれいに並んでますよ。でも、それでも收まりきらないので、屋根裏収納にも入ってますけどね(笑)。

西崎●インテリアになるものならいいですよね(笑)。

連●そういう意味で、収納を大切にする建築主は、

建築家に設計を依頼した方がいいですよ(笑)。建築主の大目にしたいものを収納したい、あるいは、収納させながら見せたい。そのようなレベルの収納は、意味がありますからね。コミュニケーションを取りながら、うまく収めたり、見せながら収めたりすることは、建築家はものすごくうまいと思いますよ。本気になれば、いっぱい作ることも可能だし(笑)。収納スペースを見つけ出すのもうまい。間仕切りの間をうまく利用したり、階段の下のスペースを収納として設計するとか。そういうアイデアはもちろん皆さん持っているのです。その上で、収納の意味みたいなものを話し合うということは大事なことですね。



CW●整理する話だけでなく手持ちの家具等の場合は、どれを残すのかということも問題ですね。**宮崎●**特に大きな家具ですね、ピアノとか、結婚のときに持ってきた家具とか。もしそういったものがある場合は、私は必ず測らせてくださいと言いますね。絶対に必要だというものは、必ず測って、プランの中に収めることにしています。計画段階でどこに置くのかということを考え、全体の空間が成り立つような収め方をすることが必要だと思います。それを忘れたり、省いたりして、建築が出来てから突然、大物が出てくるということは避けなければいけないですね。建築家に依頼す

るなら、後からタンスを買ってきて置きましょうというのではなくて、先ほどの話の安全性も考えないといけないので、置いたものが倒れるということではなくて、作りつけになっていて、それが空間を構成する大事な要素にもなっており、例えば連さんがおしゃったように、見せ方がたくさんあるというのは本当にそのなので、オープンな棚の中に照明を仕組んでそれが見える。それによって、空間が作られる。ということにも使えるわけです。見せたくないものの場合は、壁の一部として完全に姿を消してしまう。そういうことも可能なのです。それはやはり、計画段階で、どういう物をどれくらい持っているかということを建築家に見てもらって、計ってもらうという作業をやったほうがうまくいくと思いますね。

フレキシブルに生活の変化に対応していく家をつくること

中尾●最近はペット。ネコとか、イヌとかを飼う人が多いから、ペットたちの居場所を考えることも必要ですね。昔は、イヌは外で飼ってたのですが、今は家の中で飼う人が多いですからね。マンションにいるときはダメだったけど、戸建てなら大丈夫だから飼いたいという方もおられますからね。我々が照明の話をしていても、ペットの話が出てくることがありますよ。

連●そういう要求って、建築家しか応えられないという気がしますね。建築家の場合は、材料をたくさん知っていますから、例えばフローリングひとつにしても、ペットを飼われている場合、ウレタン塗装とかにするとキズがついてダメになります。染み込み型の塗装だとキズがついた場合でも、また塗ればいい、削ればいいということがあります。材料についても仕上げについても本当にいろんなことを知っていますからね。

中尾●イヌなど肉球があるものは、フローリングで滑るようですね。

加藤●滑って、転んで、足を折ったりとか聞きますよ。建築主からも滑りにくい素材をということはよく言われますね。

連●ハウスメーカーの場合だと、フローリングというと広葉樹ですが、我々は必要なら針葉樹からでも選びます。もちろん、キズはつきやすいですが、軟らかいから物を落としても割れにくい、滑りにくい、肌ざわりが暖かいというように選び方がまったく違います。

中尾●省エネルギーということもありますね。照明というのは、最近話題の高気密住宅にしろ、在来工法の住宅にしろ、そんなに変わっていないのです。でも、暖房は全く違いますね。統計を見ますと、日本人の場合は、お湯にお金がかかっています。アンケートを見ますと、照明器具はこまめに消しますかの問い合わせに6割ほどの方が消すと答えており、蛍光灯に変えますかとの問い合わせには、約半分の人が変えてもいいと答えています。でも、夏のシャワーを1日おきにできますかと聞くと、ほとんどの人ができませんと答えているように、日本人はお風呂が好きなのです(笑)。そういう意味で給湯エネルギーってすごいなと思います。省エネルギーというとエアコン、冷蔵庫、照明の3つがよく指摘されますが、給湯も相当なものですよ。そういう省エネルギー住宅というものは、もちろんハウスメーカーも取り組んでいますが、それぞれライフスタイルがあるわけですから、一概にはいえないのではという気がします。そういう意味では建築家に依頼すると、自分達の暮らしに合った省エネルギー住宅が出来るということにもなってきますね。

連●建築家の場合だと、まずは空間で勝負したいということがあります。材料で勝負したりね。でも、省エネも重要な考えていて、設備のことでも皆さんご存知です。だけど、その設備の能力に頼りきらないことがあるかと思います。設備がすべてではない。寒い、暖かいとかをどう捉えるか、そこを話し合う必要がありますね。夏が感じられる、冬が感じられる、壁を閉じてしまって、空調によって夏なのか冬なのか分からぬというよりは、住むということは、夏、冬を感じる方がいいと思いますね。そういうことを話し合う必要はあると思いますよ。

CW●今の高気密、高断熱の考え方というのは、そういう世界に近いですね。年中一定温度にしておこうという。それが本当に住空間としていいのかどうかですね。

連●それをまず話し合う必要がありますね。もちろん、そういうものが必要なご家族もいらっしゃいます。

中尾●やはり四季がある国ですからね。

連●もったいないと思いますよ。四季を味合わない、自然を感じない住空間というのは、はたしてどうなのか。冬は服を着ればいいような状況かもしれないし。例えば、風鈴をつけて、音で風を感じるという情緒の問題も含めて考えたいところですね。

CW●以前、高断熱、高気密の住宅を取材したことがあるので、エアコン1台で二階建ての家を年中25度に保てるのですが、その場合は、窓を開けてはいけないというのです。真夏や真冬は分かりますが、春や秋だと開けた方が気持ちいいのではないかといけないと感じますね。

宮崎●宮崎●ハウスメーカーのほとんどが、そういった性能を数値で競う方向になってきています。皆が何かを信じて、一つの方向に向かっている姿は、端で見ていて、どこか少しおかしいのはと気がつく瞬間も必要なではないかと思います。省エネルギーにしても、やはり、自然と全く関係を断ち切って生きていくというのは、宇宙船の中で生活しているのと変わらない状態ですね。人間って、それでは心がおかしくなったりとか、一定の明るさ、一定の温度で一生を過ごしたら、感覚的に情緒や感性が豊かでない人になったりとか、いろんな危険性が出てくるのではないかと思いますね。やはり自然との関係、周辺環境との関係、人間関係もそうですけど、関係を構築でき、それを自分で調節できるような家というのは、自由度として残しておくことが必要なのではないかと思います。高気密、高断熱住宅が全部悪いと

いうわけではなくて、前提となっている24時間空調ということが問題だと思うのです。完全に近いような高い機密性能を持たせて、屋間の人がいいときでも空調を動かすというのを前提としてしまっていますよね。でも、実は、人間の生活パターンはその家族によって、全部違うわけです。また、転職すれば勤務時間が変わってしまうとか、子供が成長して家を出て行くとか、いろんなことが起こりますよね。それを何も変えられない、自由度のないカチンカチンの設計をしてしまうことがよくなくて、人間はやはり変わるものなので、時間が経ったときにフレキシブルに変化に追随できるような設計の仕方とか、それは省エネルギーでありながら、自由度があるというものを考えていかないといけないと感じますね。

宮崎●オフィスビルの場合だと、窓はほとんどフィックスで開きませんよね。だから24時間に近い空調をしているわけです。そうするともう外に出ないと今日の天気がどうだったかとか、今年の夏はすごく暑かったのだということが分からずに夏が過ぎてしまうという人もいるわけです。家に帰ってきたときに、窓を開けて、風を入れることで、今日はこんないい風があるのだと、こんなに寒くなれたのかとか季節を感じたいという欲求は必ずあると思うのです。そういう部分を残してあげる設計が大事なのではないかと思います。環境や地域に合わせて、いろんな建築の仕方があっていいわけで、世界中を統一しようとする、同じものを違う気候のところに建て続けるとどこかで歪みが出てくると思いますね。

子供部屋は勉強部屋ではなくて、生活の場

連●今の話は、バリアフリーの設計にもつながるところがあります。気になるのは、最初からバリアフリーの建築を求めるところにあります。人間にはちゃんと機能があって、訓練ということが非常に重要な要素としてあるわけです。先ほど出た自然を感じるとかね、そういうものをシャットアウトするために、最初から完全なものを求め

るがために、そういう機会を逃してしまうという話になってしまいます。最初から、手すりをつける、スロープをつける、バリアフリーにしておく。そうではなくて、将来何かあったときに、バリアフリーの対応ができるということを考えて設計しておけば良いと思います。あらかじめ下地を入れておくとか、将来的にエレベーターを設けられるとか。最初の段階で話をしておく必要がある部分ですね。もうひとつ、子供部屋のことにもつながってくると思うのです。子供部屋を一つのパッケージとしてすべての生活ができる仕事を建築主が求めることがあります。そうすると、だいたい6畳以上が要求されます。でも、スペースをうまくやりくりすれば、子供部屋は4畳半、3畳でも間に合うかもしれませんね。そこで、寝て、勉強ぐらいができるれば十分だろうと。荷物は別のところに置けばいいし、広いスペースが必要ならばリビングですればいいじゃないかと。リビングであることによって、家族のコミュニケーションが生まれてくるとかいろんな良さがありますね。最初からこのぐらいのスペースが欲しい、それはある意味完全主義、あるいはパッケージ主義、部屋の個割り主義だとよく言います。それは建築家と話していくうちに、実はそうではないんだとオープンにしていく方がいいんだと気づいてもらえることがあります。そうすると、子供部屋を少し小さくして、リビングを大きくとろうというような話に展開できると思います。

CW●ハウスメーカーの家が、部屋の大きさを規定してnLDKというものを作っているので、展示場を見に行って、そういうものだと思ってしまう。で、そこから抜け切れないことがあるでしょうね？

宮崎●そうですね、それを外すのが結構、大変なんですよ。子供部屋には最低これくらいのスペースがないといけないと思っている人は多いでしょうね。

鈴木●nLDKという言い方も影響してると思います。今どれ位の広さにお住いですかと聞くと、こちらとしては大きさ(面積)を聞いているつもり

なのですが、ほとんどの方にnLDKですと答えられます。もうそれが、大きさを表す単位になってしまっている。そういう刷り込みってすごくあると思いますね。

西崎●子供部屋が必要な時期って、いろんなパターンがありますけど、小学校から中学、高校位まで、大学生で下宿になれば、実家に部屋が必要なのかどうか、もったいなく感じますね。

連●きっちりした勉強部屋ができれば、賢くなるんじゃないかなという幻想みたいなものあって、それを外すのが大事ですね。そういう勉強部屋という捉え方よりも、生活の場なんだと、そこで寝て、生活をする場を作っていくことが必要なのです。勉強部屋ということにこだわらなくても、場合によっては、図書館に行ってもいいし、友達といっしょに外で勉強してもいいわけですし。子供にとって、一番集中できる場所で勉強してもらえばいいわけで。何もそれが子供部屋でなくてもいいという発想もありますね。

鈴木●話がそれてしまいますが、東大の合格率って、子供部屋で勉強しない子のほうが高いみたいですよ(笑)。家族がいるリビングに出てきて、昔でいうちゃぶ台でしたほうが集中してできる。逆に誰も見ていない、一人だとなかなか集中できなくて、マンガ読んじゃったり(笑)。

プライバシーと家族の関係性

宮崎●昔の日本の住宅のように、ふすまや障子を季節によって外したり、結婚式やお葬式を家の中でしたり、冠婚葬祭場であり、生活の場であり、子育ての場でもあって、しかもそこは個別に分断されているのではなくて、誰かが見ている、おじいちゃんが子供を見ていたり、親じゃなくても、兄弟が見ていたりとか。そういうゆるやかな人間関係がきちんと確保されていたというのがあったのですね。それが、高度成長期のハウスメーカーが出した子供部屋があって、いくつ部屋があってという、先程のnLDKという発想が個別にすべてを分断する考え方につながりましたといえます。誰も見ていない中で、子供が何しているのか

建築家に依頼する前に、建築主は何をすればいいのか？

分からぬという状態。人間関係を切斷されたことによって子供が変な方向に、思わぬ方向に行ってしまう。その影響がずいぶん出るのではないかと思います。建築家がプランをつくるときは、いくつ部屋があるかが大事じゃなくて、どんな人間関係を構築していくか、もちろん1人で集中して勉強したいからという可能性もあるのですが、でも、家族がわいわいしていれば、みんな楽しそうにしてるな、ということできちんとそこに出でてくる。もちろん、集中力は途切れるかもしれません、替わりに、人間関係が分断されずにすむということもあると思います。そういう意味では、人間関係が完全に切れない可能性を残しておく、そういうプランニングをしていくということは大事じゃないかと思います。実は自分で実験をしていて、中学3年の娘がいるんですけど。



大光電機株式会社「D's Labo AOYAMA」

デザイン情報の集積地、東京青山。ここに大光電機の情報受発信基地「D's Labo AOYAMA」があります。最先端の建築家・デザイナーとDAIKOのライティングデザイナーとの交流、コラボレーションの場として、あかり、そして光の実験研究施設として活用されています。今回の座談会の会場としてもD's Labo AOYAMAの地下サロンをお借りし、クリエイティブな空間で話は弾みました。

子供部屋という仕切られた部屋がうちにはありません。シナランバー板で出来たパーティションでほどよく区切り、その向こう側に勉強机があって、家族と収納は共有しています、あとは天井についたロールスクリーンを下ろしたりしながら、視線をさえぎったりとか調整ができるようにしています。しかもそのパーティションは床に固定していくなくて、動かせるわけです。小学校から中学校に入ったときに、少しスペースを広げて、リビングをその分、少し減らすという調節をしてあげたりしながら、なんとかうまくすることが出来ています。あとは、実際に女の子と、男の子が両方いる家庭は、仕切らないと難しいということを聞きますが、でも、私が8年前くらい作った住宅では、もう中学生ぐらいになってるのですが、いまだに、そこは子供コーナーみたいな形で、部屋としては仕切らずに、上の空間はリビングとつながってます。例えば、ケンカして小さな声で泣いていても、リビングにいるお母さんにもちゃんと聞こえて、「どうしたの？」と声をかけることができます。そういう気配が伝わる仕組みといったものは、子供だけじゃなくて、老人の介護する場合でも苦しんでる声が聞こえれば行ってあげられますよね。個室の中で仕切っているのではなくて、ゆるやかな人間関係や気配が伝わる仕組みというのは住宅の中でとても大事なものであって、決して分断してしまってはいけないんじゃないかと思います。全員に1つずつ個室があって、全員が違うテレビを見てるというプランを作ってしまったら、あっという間に家族が崩壊してしまうのではないかと思います。プライバシーをある程度確保しながら、ゆるやかな繋がりをしつらえとして作っていくみたいなことです。その辺の加減というのは、非常に大切なバランスじゃないかなと思います。

CW●子供が個室でバラバラのテレビを見ているのでは、共通の話題がなくなってしまいますね。

加藤●子供だけじゃないですよ、夫婦でもそうですよ。

連●そういう面でいうと、建築家に頼むメリットとして、建築家は家族間の関係性を作ることがあるといえます。ものとものを繋げる、あるいはお互いの良さを生かしながら、分断するとかね。そういうことを一度は考えて欲しいですね。つまり、部屋を設けるべきなのか、設けないほうがいいのか。設けることによって、どういう問題が発生するのか。それも家の部屋だけでなく、家と外の関係もありますよね。通りと庭との関係。通りと部屋との関係。これも塀を作るのか、作らないのか。自由に入ってきてもらった方が防犯上は、逆に安全もあるのです。外と中をつなぐことによって、今度は地域としてのコミュニティが生まれるといふこともあるのです。どうしても、最初はプライバシーということが気になって、まだ部屋、家という単位で捉えがちなのですが、もう少し建築家にいろんなことを聞いていただいて、つなげるこの面白さみたいなものも味わって欲しいとい

う気がしますね。

CW●結局、nLDK型の家自体が地域コミュニティをどんどんつぶしてしまいましたね。個別化をどんどん進めた結果、昔のコミュニティというものがほとんどなくなってしまいましたね。そういう意味では、家の持つ影響力というのは、すごく大きいですね。

連●昔は縁側があって、人がそこに来て、お茶をおいて話をします。外と中との関係がいろんなレベルでありましたからね。垣根越しに話す、縁側に来てもらう、さらには玄関まで来てもらう。いろんなレベルがあったので繋がりとしては、非常に多様で繋がりやすかったです。いろんな選択肢があってね。今はもう、びしっと閉じてしまって、開けるか閉じるかだけなので。外から入るということができなくなっています。コミュニケーションを作るきっかけみたいなものがなくなってしまったわけです。

鈴木●そこまで話がいけば、最高ですね。最初にそんな話をすると、自分の言うことを聞いてもらえないように考えて、頼みたくないということになってしまったりするので、これは難しい話ですね。

CW●今から家を建てる人は、閉ざしていくというのが当然のように思ってるのではないですか？防犯上のこともありますね。

西崎●逆に防犯の意識は高いですよね。ちょっと太刀打ちできないくらい。

中尾●照明器具でも防犯用のものはすごく売っています。我々は光防犯と名前付けているのですが、人が近づけば赤色にフラッシュするセンサー付の防犯用の照明器具を作ったのです。ある設定をしておけば、夜になって近寄ると光る接触灯です。最初は、本当に売れるのって言ってたのですが(笑)、これが結構、売れているのですよ。関東、首都圏とか近畿圏の都心で売っています。都心の少し郊外型の住宅では特にね。

連●防犯というのは、非常にいい口実ですね。防犯という言葉を使いつながら、コミュニケーションが発生するような設計をするというアイデアがあ

建築家に依頼する前に、**建築主は何をすればいいのか？**



ります。防犯上有効な家というのは、1つ目はオーブン外構です。塀がなく、外から見えることです。2つ目は砂利敷きにすることです。砂利だと音がするので有効です。3つ目はセンサーライトをつけることです。センサーライトは、スイッチをオンにすれば、ずっとつけることができますから外部での活動にも使えます。夜にバーベキューとかするときにも使えますよと言うとね、それ、いいですね。となります。コミュニケーションも発生しますしね。最初からコミュニケーションの大切さだけを話すとダメですから、防犯から話しに入るといいですね(笑)。

完成しない家がつくれることのメリット

中尾●ハウスメーカーのカタログを見ますと、家でパーティをしましょうということがよく書かれていますね。ご近所の方を呼んでとかね。でも、日本人って基本的にそういうことをしないでしょう。我が家でもそうですが、お客様が来るとなると、大変ですよ。掃除しないといけないし(笑)。日本の家って意外とそういう状況なのですよ。挙句の果てに、一部屋開かずの間が出来てしまい、そこにリビングにあるものは持っていくみたいな感じになってしまふ家というのは多いですよ。ハウスメーカーのカタログにあるように、ご近所の人を呼んで、パーティをしましょうというのが本当に出来るのであればね、もっと家の中もきれいになるし、建築にもそういうことが求められる

ようになりますね。本来はそういうことが出来ないといけないのかもしれませんね。海外に行って、家を見せてもらうとやっぱりインテリアはきれいだし、お皿ひとつ出ても、これはなんだかんだとウンチクができます、日本人ってそういうことが少ないですね。昔は、お茶とかあったときに、この器がどうとかあったのが、だんだん、なくなっていますね。そういうことができるような家を建築家と相談して、こういうライフスタイルというのが出来上がって、だから、こういう設計になってるんですよとなれば、家の中もきれいになるような気がしますね。それと、子供がアレルギーでね、例えば、新建材とかが使えなかつたりしますからね。ハウスメーカーの場合は、床はこれ、壁はこれ、クロスはこれと決まっているからそういうアレルギーの話なんか聞いてもらえないけど、対応するとなるとすごい費用になってしまいますね。でも、建築家にお願いすれば、それこそ換気のこととか、接着剤の話とか、そういうことも全部クリアにしてもらえて、しかもいろんな材料を知っておられるので、アレルギーに対する対応も柔軟です。さっきのミニチュアの収納と合わせて建築家にお願いしてよかったと思っています。

連●アレルギーの話でよくあるのが、フローリングを塗るか塗らないかということです。塗ってしまうとやはりアレルギーが出てきたりとかね。化学系のものだと反応するとか、ワックスでも反応するということもあります。そういうときに、何も塗らないという選択肢もあるのです。木をそのまま使う。そのまま使うと何が問題なのかというと、汚れが付くことです。コーヒーこぼしたら汚れがつく。それはそれで、削ったり調整すれば使えるのです。だから、完全なものを求めないということがありますね。建築というのは建ったときがすべてではなくてね。そこから変化していくということがあるわけです。ですので、建築家に頼んだときの良さというのは、3分の2完成した家をつくることが出来るということです。あの3分の1については、出来上がってからいろいろと変

えられるということ。フローリングが汚れたら、それはそれで構わない。仕上げ自体もしないで、プラスチックボードのまま子供部屋をつくってもいいと。それなら子供が落書きしても後でまた塗れますね。半分完成するということもあり得ることです。でも、その辺は、かなり説明しておかないと難しいですがね。出来上がったときに、やっぱり皆に見せたいではないですか、でも、その時に誰かに何か言われると、ちょっと辛いですよね。

中尾●今でこそ、むき出しの天井の仕上がりで、これで完成だといえますけど。ひと昔前だと、まだ工事中でいたわられたものですからね(笑)。

西崎●本当にそうですね(笑)。

連●未完成の方が、むしろ面白いといえますよね。ヒント性のある設計ということもよく言います。それは、およそ7割か8割位はつくっておいて、あとの方は住んだ人が考えてもらうというやり方です。我々はあくまでもきっかけを設計すると。きっかけを使って、建築主の方で、後から家具で間仕切るなり、いろんなことをしてもらえばいいのではないかと。仕上げについても、下地だけしておくと、あと仕上げについてはどんどんいろんなことを調べてもらって、タイルでも貼ってもらえばいいと。そういうやり方もあるのです。

CW●でも、そういうことを納得してもらうのは大変ですね。

連●ひとつやり方があります。建築主の言うとおりに、完全な設計をするのです。設計した後で、相見積りをとったら、予算をオーバーするってことはよくありますよね。その時に話をするのがポイントですね。これについては、後からでも出来ますよと分かってもらって、予算に合うように外していく。そうすると未完になるのですよ。でも、それは実は、建築主にとって、とてもメリットのあることなのです。住んでから選択する方が、確かなものを選択できますからね。

CW●要望の全部は満たせないけれど、大きな部分、大切な部分は完成していますからね。

連●そうなのです。建築家に頼む大きなメリットだと思いますよ。

鈴木●見積り調整のときに、減額するって、実は高いものを安いものに変えただけではあまり下がらないのでよね。それよりも、それ自体を抜いてしまう方が、その部分がゼロになるので、下がりますね。建築主の方が、自分でペンキを塗たりするのが好きな人ならいいですね。それを家族で楽しんでもらえれば、いいかなと思います。おさんと一緒に塗ってもらうとかね。

CW●そういうことを子供のときに教えてあげられればいいですね。今は皆さん、ほとんど家に対するメンテナンスをしていないですからね。

加藤●メンテナンスフリーという言葉がありますからね(笑)。一番、恐ろしい言葉ですよ。建築主の方もメンテナンスフリーがいいという方が多いです。最初、そういう考えは良くないですと柔らかく伝えます。メーカーが使っている材料というのは、メンテナンスがやりやすく、クレームが来ないようにしていますね。そういったことを伝えると、やっぱり掃除やメンテナンスはしないといけないんだなとなります。メンテナンスフリーのものって、最終的には取り替えないといけないものが多いのです。さっきの話に出てきた無垢材のフローリングとかなら、削ることもできます。メンテナンスフリーだという時点で、それは5、10、20年で取替えということが前提というものになってしまいます。

建築主のこだわりを伝えて欲しい

宮崎●ものをきちんとつくれる技術がその国にあるということは、その国の文化のレベルとして大事なことだと思うのですね。今の時代、輸出入が全く止まってしまうことはないと思いますが、もしさうなったときに日本国内で建築が作れないとなったらとても情けないことだと思います。京都に寺院を見に行きますと非常に優れた建具とかですね。大工の技とかですね。やはり勉強になります。外国人がいまだに京都を見に行くのは、そこに日本の文化を感じるからであって、はたして日本の建売住宅でできた町をこれが日本の住宅で

すよといって観光案内しても皆が納得するかといえばそうじゃないと思います。現代の日本の住宅って、文化的な意味で危機に瀕しているんじゃないかな。我々、建築家ももっとがんばらないといけないと思います。工業化住宅って、もともと戦後の住宅がなくて、貧しかった時代に、安価に大量に住宅を供給する目的で始まった事業であって、今の時代ほんとに意味があるのかどうかもう一度考え直してみる必要があると思いますね。建築家の存在って、ものづくりの文化、あるいは建築をきちんとつくっていく文化、それを日本の文化としてちゃんと残していくためにも、そういう使命も建築家にあるのではないかなと思います。建築主側にもそういう意識を持って欲しいですね。京都とかを見に行って、日本にもこんなすごい文化があったのだと、文化を再発見して、例えばこれから100年後、これが日本の100年前の素晴らしい文化だと見せられるような住宅が残っていくこと。それが国として文化として大事なことだというふうに思います。

連●きっかけという話でいうと、建築主にこだわりを持って欲しいですね。そしてこだわりがあれば、ぜひ言って欲しいです。そうすると建築家の方が小回りが出来るので。例えば、建築主が建具にこだわりがある。引き戸にやたらとこだわりがあると言ってもらえると、建築家は張り切れますよ。おしゃったように日本中から調べて建具屋さんを呼んでくるということも建築家なら可能なので。ぜひ、こだわりを持って欲しいと思いますね。

西崎●街並み保存とかは、江戸とか明治時代に作られた建物がその対象となりますね。今、我々がつくっている街並みが、50、100年後に保存しようという話になるかどうか、時々考えると怖いというか、少しでもそれに近づくようなものをつくりたいと思いますね。社会の流れとしてフローから少しずつストックということが認められる時代になってきたので、もうちょっと社会基盤として住宅が認められるような時代になって欲しいなと思いますね。もちろん我々も努力しないといけな

いのですが。そのためには、建築主側にもそういう意識がないと建築家だけでは、到底無理な話になってしまいます。

連●その時に面白いなあと思うのは、若い人にとっては、意外と古いものがものすごく新しいファッションなのです。我々にとっては、ちょっと古いなと思うものが、若い世代には非常に魅力的に感じるのです。昭和の文化とかね。もうまさしく新しい文化のように、若者は思っていますよ。そういう面で考えると、古いものの中の良さみたいなものを何か建築主へ提案していくって、若い人たちが魅力を感じるものがあれば、保存とか継承ということに繋げていく。若い世代の建築主だと意外と古い建物が好きだったりしますね。

費用はかければ、かけただけの内容のものが出来る

連●「完成ドリームハウス」という番組がありますが、あれに出演したことがあるんですよ。ほとんど1年間カメラが横にあるという状態でした。番組に出演してはっきり分かって頂いたことは建築家のコストの能力です。番組ではね、金額が全部出たのです。最初の見積りから交渉後の金額まで全部放送されたので、いくらコストダウンできたかが分かりますね。そうすると設計料は一般的に10～15%位の間ですから、設計料以上の金額がコストダウンできていることが理解してもらえるのです。

西崎●基本設計から完成するまで、設計と監理をさせて頂くのが基本ですが、お客様の予算と希望で、最低限の責任の持てる範囲で設計契約してもらうことも可能だと思います。設計事務所に何を期待するのか、デザインのことなのか、構造のことなのか分けて考えることはなかなか難しいですが、全部かゼロかという選択ではなく、話合い、責任の負える範囲で、適材適所設計を依頼することも可能だと思います。本音はすべて任せ頂きたいですが(笑)。

加藤●自分の家なので、結局、高い安いという話になるのですが、かかった費用は、かかっただけ

の内容の家なのです。お金がかかるというよりも、自分がかけたと解釈をして欲しいと建築主には言っています。目標が2,500万だとして、2,600万だとしたら、2,600万円の内容の家になってるということですよ。それを2,500万円に落とすのだったら、100万円分を削るのですが、それは自分の家なのですね、それを高い高いとなると損をしているような雰囲気が出てくるのです。自分の家なので、お金は自分に戻ってくるという、費用を掛けただけのものが出来ますよということを理解して欲しいので、説明はしますね。

連●建築家に依頼すれば後悔はしないはずです。我々は絶対に後悔させませんよ。それは皆さんも言えると思いますよ。全員能力もあるし、苦労も

していますから。

鈴木●気持ちのよい空間で過ごすというだけで、人生が相当豊かになると思います。そんな豊かさを一人でも多くの方に味わっていただきたいですね。

CW●本日は長い間ありがとうございました。





連 健夫

むらじ たけお

■プロフィール

1956年 京都府生まれ
1979年 多摩美術大学建築学科卒業
1982年 東京都立大学大学院修了
1982~91年建設会社勤務
1991年 渡英、AAスクール留学
1994年 AA大学優等学位取得、同校助手、
東ロンドン大学講師
1996年 帰国、連健夫建築研究室設立
2005年 おもちゃライブラーで栃木県建築
景観賞、芦原義信奨励賞、こども環境
学会デザイン奨励賞受賞

■得意分野と現在興味のある分野

建築主とのコミュニケーションの中から、個別のテーマを生み出し、それをデザインに反映させること得意としている。創造性のプロセスや手法を大切に思い、社会学や心理学などに興味を持っている。

■住まいについての考え方

「心と対話する家づくり」を大切にし、建築主との十分なコミュニケーションを通して、住み易く個性的な住宅が出来ると考えている。このためコラージュや模型など、誰にでも分かる方法を用いている。

■ローコスト(2,000万円以下)に対する考え方

共有できる空間を上手く繋げることにより最小面積で最大の効果が生まれる。ロー

・どちらからといえばイヌ派

・まちづくりや心理学関係の本

・クラシック、ポップス、オールディーズ

・人の絆

・心と環境

①光と車の家・東京都町田市 愛車マセラティと一緒に住む住宅が求められた。様々な場所から車を眺められるようにすると共に、建築主の作ったコラージュから夢を膨らませ、木格子のペランダやアプローチ、らせん階段や吹抜けなど落ち着きの中に変化のある空間づくりを目指した(木造)

②光と車の家 優しさのある木の内装、ハイサイドライトや丸窓から様々な自然光が入ってくる。床の一部は透明で車を見下すことが出来る

③光と車の家 家族でつくったコラージュ(切り貼り絵・理想的の

家)。メカニカルな光、木の連続性、円と格子など様々なヒントが得られ、建築主の夢がデザインに反映される

④ガラスの屋根の家(別荘)・長野県諏訪郡 木漏れ日や星空を満喫すべく屋根をガラスにした。網戸で囲まれたスクリーンボーチには気持ちの良い風が入ってくる(木造)

⑤波打った壁のある家・神奈川県横浜市 建築主の言葉(想連)から夢を膨らませ、曲面の壁を設けてリビングや玄関周りに広がりと安らぎ感を与えた(木造)

※撮影:雨田芳明

有限会社連健夫建築研究室 東京都知事登録 第47765号



東京都港区赤坂6-4-11

ドミ・エメロード3C ☎ 107-0052

TEL. 03・5549・9887

FAX. 03・5549・9889

takeo@muraiji.jp

<http://www.muraiji.jp>

業務時間／9:30~18:30

休日／土曜、日曜、祝日(休日でも打ち合わせ可能)

主な仕事内容／戸建住宅、店舗、事務所、教育施設、福祉施設



■リフォーム例